

入試の成績と入学後の成績

この領域における調査研究は、昭和57年度において7割をこえる大学等において行われてきたが、昭和58年度においては、さらに若干の大学・学部において、小規模な探索的調査も含めて、調査研究を発足させている。

これらの調査研究の結果は、それぞれの大学等の関係機関で発表され、入試制度改革の基本方針又は入学者選抜の具体的方策の策定に活用されはじめている。

昭和58年度は、共通第1次学力試験制度が発足した昭和54年度の大学入学者の卒業者が（医・歯学系を除き）出た年であり、入学後の大学成績が出揃ったことに伴い、専門成績との関連も、より精度のよい成果が期待されるものと思われる。

高校調査書の内容や入試成績と入学後の学内成績の関連については、入試成績との関連は低く、高校成績との関連が高いことが多く指摘されていることは、前年度の調査結果と同じ傾向である。入試の一発勝負よりも、長い目で見た成績の方が関連が高いのは、蓄積された勉強の成果を表しているものと思われ、入学後の努力

が大切であることを物語っているとの指摘があるものがあつた。入試成績と入学後の学内成績との相関が低い数値として多く現れているが、これをもって相関がないとか低いとか断ずるのは早計であり、学内成績が4段階しかなく、入試成績の連続分布と異なること、学内成績の同一科目の成績評価に差のない科目が多いなどに起因するとし、調査方法や資料の収集方法等を模索したいとしている大学もある。

共通第1次の成績と一般教育科目の成績との相関や、第2次試験の成績と専門教育科目の成績との相関が高いとする大学もある。それぞれの試験の出題内容が、その目的に沿って適当であるのであろうとしている。

推薦入学者については、一般受験者に比べて、入試成績、入学後の学内成績とも、やや優れていたが、共通第1次学力試験制度実施以降は、その傾向は縮まる一方であり、推薦入学志望者の総体的学力低下があるのではないかと若干の調査研究結果がある。

引続き本テーマによる追跡調査を予定している大学等が大部分である。